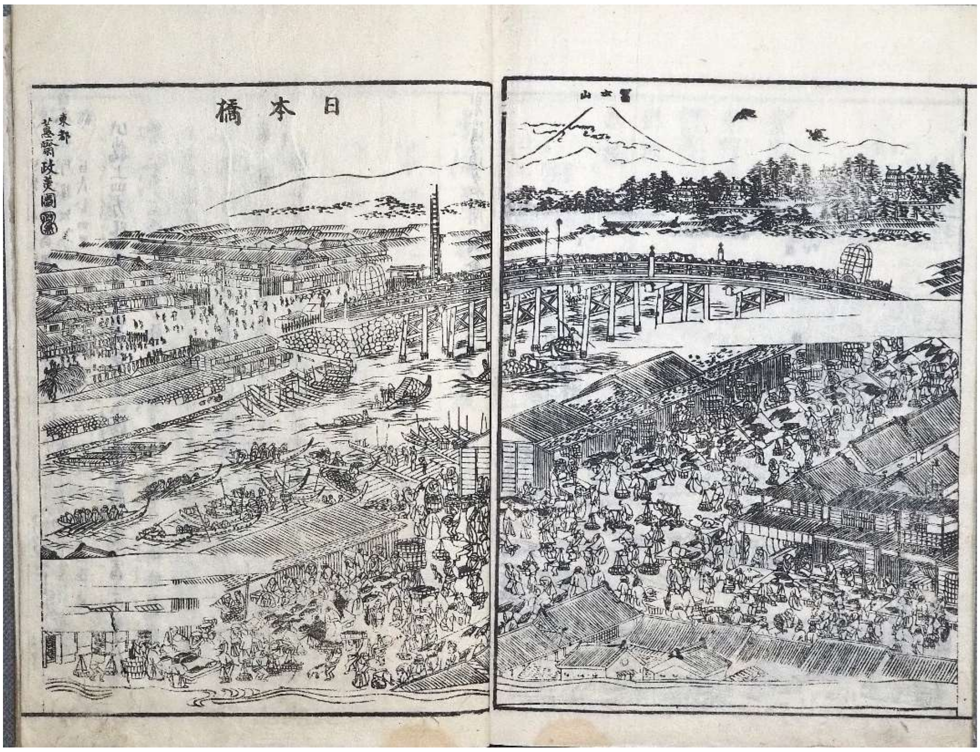
# 浮世絵へのかけはし

## 「東海道名所図会」

（草津市蔵）




名所図会の始まりは、安永９年（1780）秋里籬島(あきさとりとう)が編集し、京都の版元・吉野家為八(よしのやためはち)から出版された旅の名所案内書「都名所図会(みやこめいしょずえ)」でした。大本(おおほん)と呼ばれるB4判ほどの大きさで、絵師・竹原春朝斎(しゅんちょうさい)によって描かれた、空から眺めるような鳥瞰(ちょうかん)手法で見開きを使う写実的な挿絵は斬新なものでした。名所情報をわかりやすくまとめた記述と、惹きつけられる挿絵のビジュアルは、それまでの実用的な旅のガイドブックを読み物に変えたといえます。見て読んで、名所に行った気分も味わえる名所案内は評判を呼び、瞬く間に4000部を売り上げる大ヒットとなりました。

庶民にも身近になった旅ブームに押されて、寛政９年（1797）、秋里籬島は街道を舞台に「東海道名所図会」を著します。京の三条大橋を始点に東海道の各宿場、名所、史跡などを挿絵とともに描きながら江戸の日本橋を終点とするものでした。出版版元は京都、大阪、江戸などの９店舗、挿絵を描いた絵師は30人にも及びます。先の都名所図会を描いた春朝斎、息子の竹原春泉斎(しゅんせんさい)、西村中和(ちゅうわ)などが名を連ね、最後を飾る江戸の日本橋を江戸の絵師・鍬形蕙斎(くわがたけいさい)が渾身の見開きページで描きました。この日本橋はまさに見どころ満載で、富士山から魚河岸まで、江戸の粋を描きこんでいるといえるでしょう。

時代は下り、天保４年（1833）頃に江戸の版元・保永堂(ほえいどう)から歌川広重の「東海道五拾三次（とうかいどうごじゅうさんつぎ）」が刊行され評判となります。その中で描かれた浮世絵には、東海道名所図会の挿絵を参考とした構図がいくつもあり、草津の姥(うば)が餅屋(もちや)もその一つでした。名所図会の挿絵を彷彿とさせる旅の情景を描いた「東海道五拾三次」は、「東海道名所図会」とは逆ルートで江戸日本橋から京都三条大橋まで刊行されました。江戸っ子の視点からすれば、江戸から京都へ向かう旅の浮世絵はまさに必然です。受けると踏んだ保永堂のプロデューサーとしての手腕がうかがえます。

（令和７年３月・草津宿街道交流館　吉崎 早苗）